写真15　1945(昭和20) 年8月　反乱ののぼりを掲げた厚木航空隊の戦闘

零下40度の北満で軍事教練

藤井　昂

私達の子供の頃は戦争に始まり、戦争で終わりました。

満州事変、支那事変、そして第二次世界大戦。

支那事変の真っ只中に小学校を卒業、すぐに陸軍造兵廠[注1]に入り、我々の時より技能者養成所が設けられ、寮に入り3年間勉強と工場で実際に目で見て研修し、日常生活は朝5時起床ラッパで始まり、養成所に行けば教官は軍人、寮に帰れば軍人、ただ軍服を着ていないだけ。すべての行動は軍隊式でした。工場は戦車と砲弾を作っていました。

工場には、女子挺身隊。大学生は勤労奉仕で勉強は出来なかった。

昭和16年12月8日、第二次世界大戦が始まり。ハワイ真珠湾攻撃[注2]に始ったが、じわじわと巻き返され、サイパン・グァム・アッツ島は玉砕、そしてB29が日本本土に飛来。高度1万メートルの高さには、高射砲は届かなかった。敵機がくると空襲警報が鳴り、防空ごうに避難解除になるまで待っていました。

児童は親元をはなれ集団疎開。若い男は次々と召集令状が来て、軍隊に出征兵士を送りました。学徒出陣・少年航空兵・予科練[注3]にと年齢は少年にまで及びました。

昭和18年19歳、徴兵になり国民皆兵[注4]に突入しました。

工場では24時間フル回転で兵器の増産、日勤と夜勤は1週間交代。そんな事を繰り返しているうちに昭和19年7月徴兵検査[注5]を受け、11月25日仮集合地、千葉県市川市の湯之台に入隊。私の部隊が北満ハイラル[注6]に決まり、満州2636部隊に向かって東海道を下り、下関に着き、翌日輸送船に乗り釜山に向かい上陸しました。12月1日でかなり気温は下がっていました。休む暇もなく鉄道で輸送され、5日間走りっぱなし。唯一、食糧を積み込む時だけ止まりました。

12月5日、満州2636部隊に到着、すでに寒さはマイナス30度の寒さ。ここで初年兵教育を受け、私達は技術兵で90野砲対戦車砲、歩兵砲などを学び、演習を体験して教育が終わり、各内務班に配属され、その頃の気温マイナス40度。これからが本当の軍人。1日中あわただしく勤務があり、先輩の身の回りの世話など厳しかった思いです。

私も故国に帰還でき、この歳まで元気に生きられた事を感謝し、若い諸君の平和で幸せな世の中を願っております。

(注1) 陸軍造兵廠……旧日本陸海軍兵器廠に属した官庁の一つで、兵器・弾薬・戦闘用車両・艦船などの調査・設計・製造・検査等を担当していた役所及び工場の総称。
(注2) 真珠湾攻撃……ハワイオアフ島南岸のアメリカ海軍根拠地。1941(昭和16)年12月8日、日本海軍が奇襲。太平洋戦争が勃発した。
(注3) 予科練……海軍飛行予科練習生の略。
(注4) 国民皆兵……全ての国民が兵役の義務を有すること。
(注5) 徴兵検査……徴兵適齢の男子に対して、兵役の適否を身体・身上に渡って検査すること。
(注6) 北満ハイラル……中国の内モンゴル自治区北東部の中心都市。

私の中国戦線体験

笠間　秀雄

昭和18年12月、私が21歳の時、山下兵団楓4254部隊に入隊、北支派遣軍として前線に赴きました。初年兵1期の軍事教練を昭和19年2月まで受ける事になり、銃の名称や扱い方、撃ち方等戦闘教育を受け、来る日も来る日も雪の中での演習でした。手の指はかじかみ、軍服のボタンのはめはずしも出来ず、上官からは「たるんでいる」と何回も顔にビンタをもらいました。軍隊は兵の教育中はビンタがあたりまえでした。戦闘演習の未熟さや団体行動の不備等を指摘され、毎日が地獄の連続でした。

そんな訓練もおわり、南方要員として昭和19年3月、上海に集結し毎日が上陸の訓練でした。渡河作戦の訓練中、川に飛び込んだところ、水深が深く溺れそうになったこともあり、命がけの訓練でした。

そんな中、私は細菌性赤痢にかかり、上海第1陸軍病院に入院し、足のももに注射をうたれ、足が丸太棒のように腫れ上がり苦痛な毎日でした。そんな病気もやっと乗り越えて食事も出来るようになり元気な身体になりました。

昭和19年4月21日の明け方、私が所属する楓部隊が乗船していた輸送船が、台湾沖で魚雷3発を受け沈没し、戦友は皆戦死致しました。この知らせを聞いた時はまだ私は病院に入院中のため、一命は助かりましたが、亡くなった戦友の冥福を心から祈りました。

その後身体も元気になり、近衛歩兵3連隊に転属し、医務室伝令軍医の将校の当番となり、昭和19年6月から20年4月まで当部隊に勤務し、その後蘇州(注1)雲岩山で塹ごうを掘る作業、その後無錫(注2)に移動し、終戦の知らせを聞き、8月16日、現地から上海に移動しました。約半年後の昭和21年1月、九州の佐世保港に帰り、故郷の地を踏むことが出来ました。

出征以来2年ぶりになつかしい我が家に帰り、思ったよりも早く帰ったので家族も皆んなで喜び合いました。

私は今日の平和な世の中になれたことは、なき尊い礎があったればこそとの思いを、若い世代に知っていただく事が大切と思います。

(注1) 蘇州……中国江蘇省の都市。付近に寒山寺・獅林などの名勝がある。
(注2) 無錫……無錫か。中国江蘇省南部の都市。

日本海軍の壮絶な終焉

安藤　健治

平和を願う我々にとって戦争ほど悲惨な悪はない。

昭和12年、私が小学校5年生の7月に支那事変が始まりました。私は農家の次男として生まれました。長男の兄が北支に召集され兄は戦死しました。仲の良かったやさしい兄が戦争さえなかったらと想うと悔しくてなりません。私は両親と共に農業に親しみ、一にも二にも国のため、兵隊さんのためと収穫した米を供出し、自分の家ではまずい食べ物でした。高等2年生からは上の学校にも行けず陸軍造兵廠から学校に割り当てがあり、いやおうもなく引っ張られて兵器を作りました。その後、私は海軍横須賀海軍武山海兵団に入団し、そこを卒業して横須賀海軍砲術学校に転任しました。

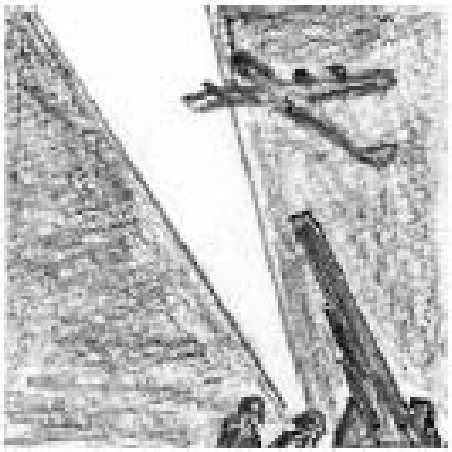
その学校では特攻隊の若者と共に勉学と訓練に励む毎日でした。軍隊というところは全体責任で、1人でも時間に遅れたり、悪い事をすると全員にビンタが飛び、大東亜勝ち抜き棒と呼ぶバットで殴られ、地獄同様な毎日でした。両親に可愛がられ、両親のひざ元より学校に通っている今日の皆さんには想像もできないでしょう。

特攻隊員(注1)というのは帰りの燃料を入れない飛行機で飛び立ち、アメリカの軍艦に体当たりして死んだ友のことです。私は運良く終戦で帰ることができました。歳は77歳です。

平和ほどありがたい事はない。世界中が平和であり、仲良く手を結び末永く暮せるよう、生命は何物にも勝る宝です。

君達若い者も世界の友達と絆を深く結び、平和を祈りましょう。地球は皆家族です。

私も命の続く限り平和運動に邁進する覚悟で頑張ります。



(注1) 特攻隊――太平洋戦争中に体当たりの攻撃を行なった日本陸海軍の特別攻撃隊の略称。「神風特攻隊」とも呼ばれた。

軍隊生活という青春時代

飯島　幸次郎

昭和12年当時、私達の青春時代は、満20歳になると、全員が徴兵検査を受ける事が義務になっておりました。病気で入院し、医師の証明書がなければ、徴兵検査から逃れる事は出来ませんでした。この時代は、徴兵検査の順序に、甲種・乙種・丙種と3種類の体格の基準になっていました。

甲種の人は、当時100人に3人か4人ぐらいしかいなかった様で、栄養状態も良くなく、現代の若い人と比べると考えられない程体力の差がありました。

昭和13年当時の平均の男子身長は150センチから160センチのようでした。体重は平均50キロから60キロ程度の人達でした。

私の家では、兄弟6人でしたが、5人が兵隊に行っていました。私も昭和13年9月、17歳で軍隊に志願をして、翌14年3月、静岡の浜松130航空航測隊に入隊しました。

ここの浜松航空部隊には、他に航空戦闘隊があり、約500人の落下傘部隊(注1)が入隊していました。ここの隊員は、毎日朝6時から落下傘訓練を行っていました。その他にも、航空高射砲隊もありました。この高射砲隊は、浜松空襲のB29に盛んな攻撃を行い、多くの戦果を出しました。

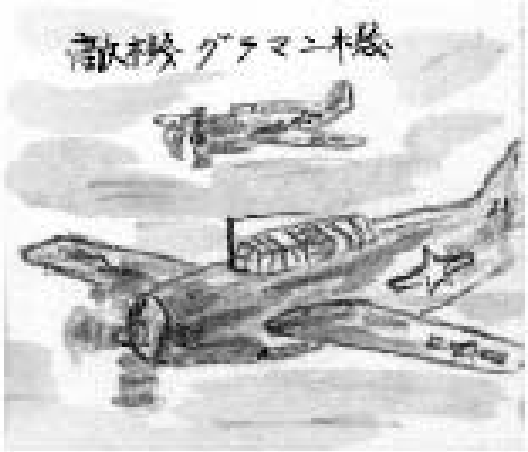
太平洋戦争が始まり昭和17年2月、マレー半島のシンガポールが陥落し(注2)、私達は指令を受け、チャギーの第1航空軍通信指令部の要員として転属したのです。その後、日本の作戦は、ガダルカナル島及びソロモン(注3)。

東部ニューギニア作戦は、次々と玉砕戦が続き、昭和20年は我々の基地の撤退を始めたのです。その後、ビルマ（現ミャンマー）方面に転戦し、九死の中を生きのび、昭和20年8月15日を迎え、終戦となったのです。

多くの戦友が前線で戦死していきました。私もこの歳まで生きてまいりましたが、世界平和と人類が仲良く共に栄えて行くことが、最も大切だと思います。

戦争はしてはいけません。

断じて。



(注1) 落下傘部隊――パラシュートを用いて航空機上から敵地に降下する部隊。
(注2) シンガポール陥落……1941（昭和16）年12月8日、日本軍が予想外の速さでシンガポールに侵攻。翌年2月15日イギリス軍が降伏したことで日本は勝利で湧きかえった。
(注3) ガダルカナル島及びソロモン……1942（昭和17）年8月以降の日米激戦地。多くの戦死者、餓死者を出した。

あの日、私はどうして生きのびたか

山中　榮

「激動の昭和と私の歩み」

昭和18年5月1日、北海道最北端の地、北千島占守島(注1)守備を命ぜられ、私の所属する隊約150名は、小樽港を出発し、占守島に上陸した。昭和18年5月30日、すぐ近くのアッツ島は玉砕した。

占守島は周囲を海に囲まれ、縦28キロメートル横12キロメートルの小さな島である。地上には1本の木もなく、風と雪のため、道路は地べたをはっているのみである。冬の占守島は、吹雪と強風で恐ろしい。しかし、当地は、サケ、マス、カレイ、サンマ等の魚がたくさんとれ、日魯漁業会社の季節労務者が、5月頃から魚を捕りに来ていた魚の宝庫でもあった。

昭和20年8月16日、終戦翌日にもかかわらず、突如、占守島国端岬に、敵ソ連軍が、上陸してきた。最初は、アメリカ軍かと思っていたが、ソ連軍であった。北部独立歩兵第82大隊の少佐は、「敵に一歩も寄せつけるな。水際で撃滅せよ」と、全軍に出撃命令を下した。

15,000人の日本軍は、1ヵ所に集中し、戦闘と化した。8月17日、第91師団長の中将は、北海道樺太千島防衛を統括する第5方面軍からの命令に基き、8月18日午前2時頃、占守島北端の竹田浜に、敵兵力数千人のソ連軍が、急襲不法上陸した。少佐の指揮により、戦闘を開始し、激戦が続いた。戦車連隊の連隊長は「ソ連の侵入者1人残らず海に叩き落すまで奮闘せよ」と大声で訓示した。戦闘は続いたが、敵の間断なき砲撃のため、不利となり、我が戦車隊は撃破され、連隊長以下、96名が戦死した。

私、山中機関銃分隊は第1戦で、3日3晩に渡る敵との戦いが続いた。いよいよ、敵との肉弾攻撃の体勢に入った。その時、後方からの援護射撃のための砲弾がなくなった。肉弾攻撃を中止し、白旗を敵に差し出し、戦闘中止となり、敗戦した。日本軍全員が、三好野飛行場に集結し、武装解除し、全員捕虜となり、ナホトカ(注2)に連行されることに決定した。

准尉以下、私を含めた8名は、ソ連軍が武装解除中、一瞬を捉えて、脱出を決行した。8月20日夕刻、長崎港に停泊していた独航船福富丸で島伝いに航行中、松輪島付近にてうづ巻く三角波に遭遇し、船は、沈没寸前となった。急きょ、船の燃料の入ったドラム缶数個、全部の食料その他、手当たり次第海中に捨てた。その後、脱出以来15日かかって9月4日北海道知床半島チップ泊港にたどり着いた。翌日、札幌軍司令部に出頭し、軍事裁判の結果、敵前脱出にもかかわらず無罪放免となり、第4次復員(注3)となった。無罪となったのは当然で、日本軍はすでに敗戦していたが、我々8名は、誰も知らなかった。日本の歴史上で、敗戦後、最後の戦いをした私の経験を、若い世代に、伝えたい。2004年8月15日　記す。

(注1) 北千島占守島……千島列島最北端の島。戦略的重要性から、日本海軍の要塞陣地となっていた。
(注2) ナホトカ……ロシア・極東地方沿海州の日本海に臨む港町。極東交通・貿易の中心地。
(注3) 復員……戦時の体制にある軍隊を平時の体制に戻し、兵員の召集を解くこと。また、召集を解かれた兵士が帰郷すること。

戦争の悲惨を繰り返すな

三浦　福好

世界は、なぜ愚かな戦争の歴史を繰り返すのか。日本も第二次世界大戦を始め、過去にいくつかの戦争を繰り返し、国民に多くの犠牲を強いられ、世界からも信頼や疑惑を未だに払拭されていない。

戦争の道を歩んだ日本は、最後に核兵器によって、人も物も焦土化された。

時代が変化する中で、戦争の記憶は次第に薄れつつある。今もう一度戦争とは何なのか、人が死に、物の奪い合い、焼きつくし破壊する。銃を持って、憎しみのない者まで殺しあう。

世界のどこかで歴史を繰り返し、民主主義や平和と叫びながら、矛盾する戦争が無くならないのはなぜか、愚かなのは人間だ、戦前、戦中、戦後を生きてきた者としての心境である。

私は第二次世界大戦の末期、わずか15歳で召集令状により6ヵ月間、海軍水測兵として戦争の目的も解らないまま、言われるままに従軍してきた。終戦59周年後の現代、戦争つまり兵役の体験がある者としては、一番若い者である。その若かった少年兵士も、現在は75歳の高齢者になった。

入隊して新兵教育を振り出しに、15歳の子供には重い38式銃を抱えて演習を行い、対潜学校の卒業訓練を江堂海岸で米軍の艦載機による機銃掃射に囲まれながら、旧式の38式銃で応戦したのが初めての実戦として記憶に残っている。

九里浜にあった対潜学校では、音波によって敵の潜水艦を発見し、魚雷によって爆破させるという訓練で、ピアノを使って音感を高める教育であった。

ところが沖縄戦が厳しくなり、今になって考えるには戦況の悪化で、音感教育等悠長な訓練は見直され、実戦部隊への配属となり、佐世保海兵団に所属、それも東の間わずか11日後には、田浦の水雷学校(注1)に転属、しばらく人間魚雷の練習が始まった。小さなベニヤ板で作ったような船の両脇に4メートルくらいの魚雷を抱え、敵の軍艦に体当たりする。つまり今でいう自爆テロのような作戦である。

いよいよ命はこれまでかと覚悟していたが、それも束の間、広島の大竹にある潜水学校へ転属となった。大竹市は、原爆投下された広島から西方25キロメートルに位置している。

そして8月6日の朝炎天下、米軍が広島に原子爆弾を投下したその時、潜水学校の海岸でカッターに乗るための準備をしていたところ、雷の閃光のようなものが光って、一瞬顔が熱かった。隣りにいた戦友も同じように感じたらしい。原子爆弾の知識は全くなかった。広島の方向を眺めると、ゴロゴロと雷のような音がして、いわゆるきのこ雲がむくむくと上がるのがよく見えた。

もしかすると石油タンクが破裂したのではと、しばらくきのこ雲を眺めていた。

その内に、ピカドン（原爆のこと）であることがわかり、その夜から厚手の布に目の部分だけ切り抜いた覆面が配布され、それを頭から被って防空ごうの中で眠る日が続いた。

原爆投下から3日間くらい経って潜水学校

(注1) 田浦の水雷学校……幅員第6田浦町。水雷の通信技術などの教育を行なった。

回想

末吉　輝保

①入隊、経理室勤務

昭和15年2月初旬、満州東安省奨徳第874部隊に入隊する。

この地の気候は春秋のシーズンが短く、6、7月になってやっと草原に青い芽がふいてスズランの芳香がノスタルジーを感じさせてくれた。10月から3月は零下10度から40度にもなる酷寒である。厳しい環境の中で第1期訓練終了後、経理官を志し試験に合格、経理室勤務になる。

②南方戦線に出動

昭和17年2月、関東軍司令部から出動命令が下り、まず第2中隊150人が先発する。同年11月、主力1,100人が後発。

赤道線に近づくにしたがって暑くなる気温は30度になり船内にはいられない。わずか数日間で気温差が50度にもなり、全身悪寒と頭痛に一時悩まされる。米潜水艦の行動する海域を警戒しながら昭和18年1月中旬、ラバウル港(注1)に着岸。この日は、船に一泊する予定だったが、軍司令部の命令で急きょ下船する。付近に天幕(注2)を張り仮泊、日没になって間もなく米軍爆撃機が来襲し、我らが乗ってきた船は直撃を受けて沈没する。下船したおかげで命拾いしたが、船員数人が負傷する。

ここから約50キロ離れた南西方向ガゼル岬に移動する。悪路と戦いながら午前2時ごろ目的地に到着する。遠浅で50メートルばかり先が深海となる。軍司令部から別命あるまで、ここを駐屯地(注3)とすることが決まり、さっそく飲料水を確保するため付近を捜索し、井戸作りに各部隊が汗を流す。

次の作業は家作り。照りつける暑さの中で1週間ばかりで完成したが蚊帳を使用できない天幕生活でほとんどの隊員がマラリアに感染し40度の高熱を出して倒れる。私も同様10日ほど起きあがることができなかった。

付近に小高い丘があって、洋館が建っていた。戦前にドイツ人家族が居住していたが、帰国して空き家となっていたので、この家が部隊本部となる。駐屯地は比較的安全であった。だが、前線のソロモン諸島では、米豪連合軍の総反抗によって苦戦が続いていた。

昭和17年前期ころから、ソロモン海峡では米潜水艦の攻撃によって輸送船の大半を失う。

昭和19年に入ってからラバウルに対して米豪軍の爆撃が始まる。

我が方も数ヵ月続いた戦闘で迎撃機の大半が撃墜され、戦力は激減していった。駐屯地も頻繁に銃撃されるようになる。軍司令部命令で奥地に移動する。目視できる沖合から連日に渡って米戦艦群が陸地に向かって砲撃してくる。美しかった椰子林は1本も無くなり、穴だらけの荒地に変貌していった。

1週間が経過したが、上陸してくる気配は見えなかった。陸海軍10万人が守備するラバウルは、完全に取り残された。

昭和20年8月15日に天皇は国民にラジオを通じて終戦を告げる。この時期には、ラバウルでは、一般兵士たちは敗戦を信じなかった。

(注1) ラバウル……パプアニューギニアに属するニューブリテン島北東部に位置する港湾都市。太平洋戦争中は日本海軍の基地があった。
(注2) 天幕……雨露をしのぐために野天に張る幕。現在のテントに当たる。
(注3) 駐屯……軍隊がある土地にとどまっていること。

翌16日米機から降伏勧告ビラがまかれる。3日目になって軍司令官より将兵に対して敗戦の告知と今後の心構えについて布達される。

ここに至って部隊長はじめ隊員、悔し涙で敗戦を自覚する。戦火が止んだ。幾多の死線に晒されながらも、生き残る事ができた。部隊の戦病死250人余。

③抑留収容所

戦闘中は、いつ死んでも悔いはない心構えでいたが、こうして生き延びた現実は、ここでこのまま死にたくない気持ちでいっぱいだった。

ほとんどの輸送船を失い帰還が何年先になるやら不安と焦燥で過ごしていた。

作業から戻って来る隊員たちの話題は決まって故郷の家族のこと、どうしても生きて祖国の土を踏みたい。我々を迎えに来る船は、いつ頃になるんだろうか思いは皆同じである。

このような環境のなかで沈みがちな気分を引き立たせてくれたのが演劇班の誕生であった。各中隊から出演希望者が10人ほど集まり、脚本の本読みが始まる。演芸会場は、抑留所内に作ったバラック(注4)である。退屈な日々を過ごしていた我々にとっては最良の楽しみであった。

④復員

終戦から4ヵ月が過ぎた。収容所生活も2ヵ月余になる。早期帰還を半ば諦めていたころ全く予期していなかった朗報がもたらされる。米国政府が船舶を貸与してくれることが決まり、2月から開始されるという。長期抑留を覚悟していただけに全員感涙、万歳三唱、肩を抱き合う。この日は眠れなかった。

我々部隊の乗船予定は5月1日に決まる。一日千秋の思いで待ちに待った乗船日がやってきた。8ヵ月余りの収容所生活であった。3年4ヵ月間戦ったラバウルを離れる。

3日目の夜、甲板に出ると夜気が大分涼しくなってきた。満天の星群が宝石をちりばめた如く輝いている。南十字星はもう水平線から没してしまった。大分北上したようだ。5日目の朝を迎える。午後、名古屋港の桟橋に接岸、直ちに下船する。桟橋背後の倉庫は、ほとんど爆撃や艦砲射撃で破壊されていた。

援護局職員の先導で倒壊を免れた倉庫に案内される。夕食には、久しくお目にかかれなかった梅干が入った握り飯が出た。懐かしさと美味しかったことが忘れられない。この日は、倉庫の床にわら布団を敷いて毛布に包まって一夜を明かす。

関東地方出身者が集まって東京駅まで同行する。別れ際に、何年先になるか判らないが落ち着いたら靖国神社で再会しようと誓う。6年4ヵ月ぶりで故郷・横浜の土を踏む。足元を見て。「あア、生きて帰ったんだなあ。」と思いながら、我が家に向かう。

(注4) バラック……粗造の仮小屋。

シベリア抑留体験（バイカル湖畔）

及川　勝郎

私は岩手県の生まれです。小学校に入る頃に戦争が始まり、6年生の時には先生から将来のことを問われ、男の生徒はほとんど軍人と答えました。中学（旧制）に入ると、戦争は激しくなり、学校では勉強も十分にできず、英語は敵国の言葉であるから禁止となり、1日の半分は軍事教練の毎日でした。国からは学校に対して、少年兵の募集を義務付けられます。しかも、修身（道徳）(注1)の勉強では、君（天皇）に忠義、親に孝行することを教育されました。

戦争が激しくなると父の商売もできなくなり、母は早く死亡したので早く兵隊にいくことが君に忠、親に孝行と思いまして卒業しないで17歳の春に浜松の飛行隊に入隊しました。しかし、兵隊生活は思ったより厳しくつらい毎日でした。

3ヵ月の教育期間を終え、満州国（中国）に派遣となりました。きてみると、飛行機はほとんど南方に移動し、残っているのは飛べない飛行機だけでした。

満州での軍の生活は内地（日本）より更にきびしく、上下の差もなく言い分けはきかない、ちょっと間違うと殴る、蹴るのひどい毎日でした。夜になりベットに入り、なんで兵隊を志願したのかと、亡き母を思い出して泣く日もありました。

こんなわけのわからない事では戦争に勝つわけがありません。日本は神国であり必ず最後は神風が起きて大勝利するという神話めいたことを信じていました。南方での戦も負けていることを聞かせずに上官（上司）はいつも勝利、勝利と話すだけでした。

遂に、8月15日は終戦となり無防備の所にソ連軍が怒涛の如く侵入して私たちは武装解除（兵器を放棄）となり、敗戦の惨めさを知りました。ソ連軍は当時、ドイツ国と戦い負け戦をしたので、物資はほとんど欠乏していたために、ソ連兵は私たちの物や満州にあるすべての物を没収、略奪して貨物列車に積みこんでいきました。私たち関東軍(注2)の兵隊50万人は着の身着のままで貨物列車に押し込まれました。貨物列車は、2段式に改造してあり、逃げられないよう外からカギをかけ、ソ連兵が鉄砲を向けて監視するのです。どこに行くとも話さず、北へ北へと走るだけでした。

1ヵ月後、のろのろ列車でやっと国境の町はずれにつきました。この年は、零下40度というすごい寒さでした。そのために、私たちは手や足に凍傷にかかる人がでてきました。吐く息も真っ白になるのです。これから、長蛇の列と言われる如く、ただただ下を向いて、もくもくと歩くのみでした。

食事は満州国より略奪した家畜の餌である大豆の豆かすのかたまりを砕いて食べました。他に何もない。そのために下痢をする人がでるのです。この人は後方に追い出したが、生死については不明でした。2日間は寒さと食料との戦いでした。

着いた所は、バイカル湖畔(注3)でした。そこから船に乗り、2日間でバイカル湖を横断して到着した所は、林の中の1軒の長屋で、ソ連の囚人が先月まで入所していたこの収容所は、周囲4ヵ所に高い監視やぐらがあり、鉄線を張り巡らし、逃げきることができな

(注1) 修身……旧制の学校の教科の一つ。天皇への忠誠心の涵養を軸に、孝行・忠勤・勤勉などの徳目を教育。第二次世界大戦後廃止。
(注2) 関東軍……満州に駐屯した日本陸軍部隊。日露戦争後配置された関東都督府が関東庁に改組された際、その陸軍部が独立したもの。日本の満州支配の中核的役割を担ったが、1945（昭和20）年8月のソ連参戦によって壊滅した。
(注3) バイカル湖……ロシア、シベリア南東部にある南北に細長い大湖水湖。

戦争体験記

小林　一男

私は昭和15年12月現役兵として富山の連隊に入隊した。同隊で3ヵ月初年兵教育を受けた後、華北に派遣され21師団歩兵62連隊に編入された。そのとき以来華北に1年、比律賓に1年、仏印(注1)に3年間、転戦し寧日(注2)ない日々を送っていた。

終戦の20年8月15日には仏印の首都ハノイの西北400キロ、中国雲南省南部で河を隔てて対峙している国境の町ラオカイに居た。私は同地にあった師団司令部直轄情報班で、中国軍の動静を調査する任務に就いていた。終戦より5日ほど過ぎた日に中国軍より手紙が来た。開封すると「停戦及び武装解除の交渉をするため日本軍代表を本日の夕刻までに、対岸の河口にある中国軍司令部に差し出すべし」というものであった。

ラオカイ警備大隊長津田少佐は直ちに幹部を集め対策を協議した。その結果、情報班長菊池大尉が中国軍事情に通じているので、最適任であるという事で選任され、通訳として私が指名された。

夜のとばりが下りる頃、津田少佐以下多数の見送りのうち渡船場に行くと、既に迎えの船が待っていた。直ちに乗船して、20分で対岸の河口の船着場に着いた。そこより、先導者の案内で約10分ほど歩くと道路の両側は武装した中国の兵士が3メートル置きに道路を背にして警戒して物々しい。町は日本軍による爆撃で破壊されており、まともな建物はほとんど見受けられない。その中に1軒だけ残っている、わりに大きな家に案内され、そこが司令部である事が知らされ、直ちに談判室と思われる会議室に招じられた。着席すると、正面の中央にいるデップリした恰幅の良い将軍が口を開いた。

「私は連合軍最高司令官マッカーサー元帥の命により、仏印の北緯16度以北にいる日本軍を武装解除する任務を受けた雲南軍第1方面軍軍長萬保邦大将である。日本軍はすでに戦いに破れ無条件降伏している。しかし、一部これに従わないものあればここの北方の蒙自にいる米空軍に直ちに爆撃を命ずる事になっている。しかし、何もこれを望むものではない。せっかく今日まで生命永らえてようやく終戦に漕ぎつけたのに無益の抗戦をして更に多くの死傷者が出る事は忍び難いものである。我々の最高領袖蔣介石総統は全軍に布告して曰く、戦争は既に終わった。降伏する日本軍には過去のわだかまりを捨てて寛大に遇せねばならない。即ち以徳報怨（徳を以て怨に報いる）の方針が宣布されているのである。危惧することなく武装解除を受けられよ」と厳かに述べた。

菊池班長はこれを聞き感動し「必ず貴軍の意のある処を伝え、この命令に服させるであろう」と答えた。これでひとまず交渉は終り、別室にて中国軍心尽しの酒肴が出され会食となった。食事中、萬軍長曰く「中国軍は日本軍の勇戦奮闘には敬意を払っている。又民族の優秀性も良く知っており、同文同種(注3)の間柄として親近感を持っている。抗戦以来10年、中国の国土は荒廃し、今後は平和な日本人の協力を待てこの国土を復興せねばならない。そのためにも日本民族の衰亡は中国にも由々しき問題である

(注1) 仏印……仏領インドシナ半島のこと。
(注2) 寧日……安らかな日々。
(注3) 同文同種……文字を同じくし、人種を同じくすること。主に日本と中国についていう。

と縷々(注4)語り、ついで「細部についての打ち合わせのため、参謀長以下数名の人員を派遣するのでよく打合せされたい」と述べた。かくして場内は次第に和らぎ約1時間にして宴は終った。

直ちにラオカイに帰り船着場に降りたところ、深夜にもかかわらず津田少佐以下多数が結果如何と我々の帰りを待っていた。菊池班長は、直ちに交渉の結果を報告すると、一同頓く安心しホットした空気が感じられた。

翌日から、中国軍は参謀長以下の先発隊を派遣し、来り、細部の交渉が始まった。結局日本軍が引き渡し物件のリストを作り、中国軍はそれに基き数量点検の上収納することになった。中国軍はおごることなく、日本軍も卑屈になることなく厳正に引渡し作業が遂行された。かくの如くラオカイ地区での武器引渡しは、何の混乱も無く無事終了した。数日後ラオカイの日本軍はハノイ地区に集結することになったが、道中ベトナム軍の襲撃を受けるおそれがあるので、最小限の武器の携帯を許され藹々としてラオカイを後にした。

終戦時、各地にいた日本軍の武器の引渡しは、多くの地区では無秩序による混乱が起こり、あたら尊い生命を失ったと聞くが、北部仏印地区は秩序整然としてトラブル無く、全員無事に故国の土を踏む事が出来た事は特筆すべきことである。中国軍はハノイ地区に集結した武装解除された日本軍を捕虜として扱わず「徒手官兵」として遇し、居住している兵舎は「徒手官兵集中営」と名付け、日本への帰還船が来るまで必要とする食料被服を与え、自由運営を許していた。

一方、北緯16度以南にいた日本軍は英仏の連合軍により武装解除され冷遇された。即ち敗戦の軍隊の見せしめとして道路清掃や港湾荷役等の使役に駆り立てられた。これは今まで仏人が一百年間ベトナムを彼等の植民地として君臨していたのを、日本軍により短日時にくつがえされ、面目を失ったのでその報復ではないかとも考えられる。この様に北緯16度を境にしての明暗の事実は、あまねく日本国民に知って頂きたいと考えている。

(注4) 縷々……こまごまと述べるさま。

苦難の撤退作戦

池田　雄

昭和17年初旬、英印軍は、在ビルマ（現ミャンマー）の我が軍に対して反攻を着々と進めてきた。これに対し我が軍は、一挙に戦勢を挽回すべく、英印軍の拠点であるインパール（印度東部）攻略の作戦計画をたて、雨季が来る前にと直ちに実施に踏み切った。

この作戦は当時、我が方に制空権なく、軍の補給、装備の劣勢、あるいは地形の険峻等、当初から危惧される点が多く、これが後に無謀極まりないと非難を浴びたインパール作戦[注1]である。

そして結果は、3個師団約三万数千余名を投入したにもかかわらず、惨憺極まりない敗戦に終ったのである。

我が工兵連隊（仙台編成）がこの作戦に参加したのは、戦局が日増しに険悪な状態となり、第1線部隊が逐次撤退を開始した極めて悪条件での時であった。

私達の中隊は、この撤退部隊の支援のため、マニプール河（ミャンマーの大河イラワジ河の支流）の渡河作業と撤退路の補修の任についた。折からこの地は雨季の最中、連日の降雨で河は増水し、河幅約100メートル、流速毎秒4、5メートルという激流と化しており、渡河作業は本職の工兵隊といえども、毎日が危険の連続であった。そのうえ、食糧が欠乏してその調達も大変なもの、交代で付近の部落や野原に雑穀、芋類、食べられそうな雑草などを採りに出かけ、ビタミンなど栄養の補給に努めた。

そして9月中旬まで多くの悪条件に耐えて、前線部隊の将兵を完全に撤退させるまで、縁の下の力持ちといわれる工兵の任務を全うしたのであった。

その間、9月に入ってからは、渡河点に対する爆撃が毎日のごとく激しくなり、舟艇等の損傷が日を追ってひどくなったが、特に敵は時限爆弾を大量に投下するようになった。これの処理にあたる我々は、未経験の上に、その危険性を思うと誠に心痛の思いであった。

処理班は渡河点に落下した時限爆弾を掘り起こして、信管[注2]を取り除けば処理済となるが、当時としては時限装置の取り外しは、方法不明と、いつ爆発するか分からない危険性のため、そのまま上流500メートルの放置点まで籠[注3]にのせ、てんびん棒で運搬し、そこで自然爆発するのを待つ方法をとった。それで10数発は無事に終了した。

ところが、続行しているうちに、最悪の事態が発生した。掘り上げた150キログラム爆弾が搬送中炸裂し、6名の戦友が尊い人柱として散華[注4]したのである。

ところで、主任務の渡河であるが、後方から搬送した鉄舟で門橋（2そうの鉄舟を平行にして橋板を渡したもの）を組んで渡河作業は進められる。破壊された鉄橋の横たわった桁からワイヤを張っただけで、振子のように、門橋を岸から向こう岸に水流を利用して移動させるのである。

敵の渡河点に対する攻撃は、日を追って熾烈を極め、鉄舟の門橋は機関砲の掃射により、穴をあけられ使用不能となった。そのあとは空ドラムを結束して、その上に橋板をのせ、間に合わせの急造門橋で対応し

(注1) インパール作戦……1944（昭和19）年2月、日本軍は十分な計画もないままインパール攻撃を敢行したが、食糧等の補給もなくマラリアや飢餓に苦しめられ、惨めな敗北となる。3万人以上の死者を生んだ。
(注2) 信管……必要なとき、必要な場所で確実に爆薬を起爆させる装置のこと。
(注3) 籠……竹を網のように編んで、四隅に綱をつけたもの。かご。
(注4) 散華……本来は仏に供養するために花を散布することだがこの場合は祭って、華と散ると解し、戦死をさして言う。

た。

さて、肝心の任務は、第1線から続々と下がってくるほとんどが栄養失調で病人に等しい将兵、これらを1人でも多く後方へ送ることである。渡河には空襲を避けるため、専ら夜間作業であったが皆必死に頑張った。

かくして、ドラム缶門橋は、毎日修理の手を加えながら、最後には師団長以下師団の幹部と軽戦車2両を渡して渡河撤退作戦を完了した。撤退は進撃より精神的にも肉体的にもその苦痛は倍加するものである。

戦争の体験は、我々だけでたくさんである。2度と繰り返すことのないよう祈ると共に、異国の地に散った戦友の慰霊を今後も生ある限り、続けていきたいと願っている。

私の十年間の戦歴（満州三年、中国七年）

清水　貞三

昭和9年兵として現役甲種合格(注1)。騎兵第26連隊（愛知県豊橋）入隊となると、当時本隊は満州事変に参加して居りまして南満の通遼に入隊。昭和12年4月北満ハイラルに移動し、寒冷地に愛馬と共に野外訓練、昭和13年8月に北海道旭川部隊と交代し、我が部隊は、北支戦線へ移動し、河南省杞県に駐在し（約4年間）、各地の戦闘に出動。昭和16年6月武漢攻略戦に参加し、昭和14年5月頃より漢水の警備（約1年間）間もなく昭和19年4月中支派遣軍の京漢作戦に参加も、昭和19年5月15日中支派遣軍参加中、漢水の左岸（ラカンジ）の手前、渡河点の堤防上に敵の機関銃陣地があり。

加藤中支軍司令官より陣地付近を夜間偵察セヨとの命あり。

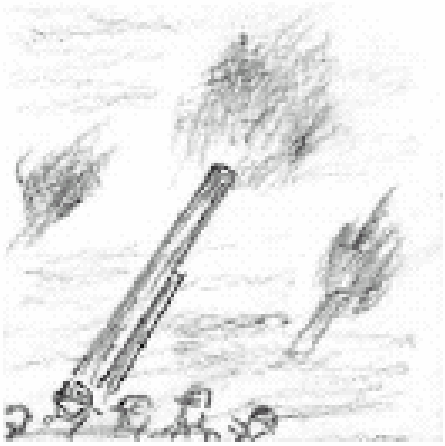
中隊長より清水は兵2名を連れて夜間斥候(注2)し、機関銃陣地付近を偵察せよとの命下り、同日15日夜10時に出発し、掩家場より300メートル位、100メートル位行ったところに兵2名を残し、単身クリーク(注3)にそいて陣地見て帰り中隊長に報告す。

次に誘導斥候となり中隊全員を誘導す。

朝4時30分頃私は真先に敵陣地に突入し、真中に手榴弾にて負傷す。この報告と共に倒れて軍医の手当てを受ける。

南京日赤病院にて弾を取り、上海陸軍病院で3ヶ月治療し、原隊に戻る。

昭和20年8月老河口作戦参加し、現地にて終戦を迎えました。戦勝国蒋介石総統のお陰でシベリアにも行かずに生還できました。昭和21年5月博多上陸生還す。第4旅団騎兵第26連隊第1中隊陸軍騎兵准尉。



(注1) 甲種……徴兵検査において、「身長152センチ以上にして身体強健」の者のこと。
(注2) 斥候……敵状・地形などの状況を偵察・捕捉させるために部隊から派遣する少数の兵士。
(注3) クリーク……小運河、堀い水路。

千切れ雲

見上　睦

昭和17年は、激動の年であった。開戦以来郷土でも銃後の備えは次々と進められ、高座工廠(注1)の拡張に伴い、我が家の所有する土地の大半が買収されることとなった。年末までの期限で移転しなければならない。庭木類は期限内の移転が時期的に難しいこともあって、大部分を残したまま新しい急造の家に移らねばならない。古い木造の家屋を解体し、馬車に頼っての運搬作業であった。母屋が完成するまでの1ヵ月間は、物置小屋の土間に寝起きしなければならなかった。そして、残りわずかな農地で兼業農家を続けねばならない羽目となり、まことに厳しいこととなった。万事休すである。特に、農家として生きてきた老父にとっては、心細い毎日であったと思う。寒い冬であった。

当時、苦難に満ちた肉体労働を強いられる養蚕を主体とした農業経営に行く先の不安を感じ、給料での現金収入で労力を買い入れ、父の農作業を支え、先祖から受け継いだ農地を維持していこうと、小学校の教員の道を歩んでいた。そして、妻をめとり、子供を授かり、老父をかかえての農地の大喪失を補うため、給料生活で身を立てるべく、県庁に転職することを決断した。

この頃には既に戦争の気配は我が国に不利となり、我が家にも防空ごうの必要に迫られることとなった。庭先の築山の下に、海軍省施設部から出た廃材をいただき、板切れを土留めや天井の覆いとして大きな穴を掘った。土曜や日曜を目当ての作業で、もぐらの穴掘りのような辛く厳しい生活がしばらく続いた。

昭和20年4月29日の天長節（天皇誕生日）、休日でその防空ごうを掘り続けているところに、私は赤紙（兵役召集令状）を受け取った。5月15日に横須賀海兵団に入団せよとの命令である。職場での壮行会や親戚などを集めての別れの酒宴が行われた。出征の前日に近所の地蔵堂前で壮行式を挙式して、後日の身辺を親戚や近所の人に頼んで出発した。親父殿にはその苦衷を察して、まともに顔向けができないほど気の毒である。頼みとしてきたであろう一人息子との別れである。死別とは決まっているわけではないが、戦況は極めて悪く、4歳の孫娘と出産を控えている嫁を控えての門出とあらば、何で笑顔で送られようか。私の心も乱れがちとなる。知人に頼んで予約してもらった宿での妻子と義兄との1泊は、決して楽しいものではなかった。

翌朝、海兵団前の道路に整列し入団した。妻子と義兄の見送りを受けて、遠ざかるであろう顔を振り向くことすらできないもどかしさが残る。後に聞いた話であるが、そのとき幼い娘は、私を置いてきてしまったと泣き崩れ、どうしても歩こうとせず、困り果てた身重の妻は、腰紐か何かで背負い、しかも大和駅から長時間をかけて徒歩で帰宅したとのことである。

入団後は、厳しい訓練が続き、夜は空襲のための防空ごうへの行き来に眠りを覚まされることしばしばであった。入団した兵員を5月末には二分され、私は軍用列車で青森に向かった。命令により閉ざされた車窓からは外の景色すら見ることもできないまま、空襲で破壊された線路の残された部分を心細

(注1) 高座工廠……1943(昭和18)年海軍航空兵器製造工場建設計画により、座間市・海老名市にまたがった地に設置（今の相鉄線さがみ野駅付近）。「雷電」をはじめとする海軍の戦闘機を生産していた。横浜・大和地域からも動員されていった。

くも走った軍用列車の哀れな行程だった。こうして椿山飛行場[注2]の八角兵舎（林間に設けられた2階兵舎）に移り、さらに初年兵訓練を受けることとなる。6月上旬というのに、樹木には溶け残った雪が積もっており、手足がしびれるような寒さに悩まされた。

なお、横須賀で分かれたもう半分の兵員は、浜松に送られて清水港から外地へ送られるところを、伊豆半島の沖で敵の潜水艦に攻撃され、海の藻屑となってしまったと聞いた。同日入団の同僚が戦死したという知らせを聞き、老父と妻はどんなにか心細い思いをしたことだろうか。後に聞いたことには、私の出征後いかに空襲警報が激しくなってきても、老父は、息子の拵った防空ごうで死ねれば本望と、他のごうには行かないと言い張っていたという。そのときの家族の気持ちを思うと、いたましくてならない。

2週間の訓練のあと、真戸[注3]に向い、天狗山に砲台を設置する作業にあたった。結局、この突貫的に要求された設営工事は間に合わず、台座のみを設けたところで、8月15日の終戦詔勅[注4]を聞くこととなる。みんなほっとした様子であった。静かな沈黙がしばらく続いた。放心状態の兵もいる。それぞれの異なった事情を抱えての終止符に、おのおのの感情で臨んでいることと思われる。さわやかな風が熱気を帯びたテント張りの兵舎の中を、静かに静かに通り抜けて行った。こうして向えた終戦の詔勅は、安堵というか落胆というか、死なずに帰れるというひそかな喜びか、複雑な気持ちで聞いたのは、私1人ではなかったろう。とたんに家族の顔々が浮かぶ。

やがて解散命令を受け、列車を乗り継ぎ、車中の食料と10枚近い毛布を背負って、なつかしい車窓を眺めながら相模大塚駅に着く。閑散とした駅や、駅から見られる厚木飛行場は平静を保っているように見えた。荷物の重さを背中に感じながら東柏ヶ谷まで来て、なつかしい我が家が見通せた。ここで私の張りつめた心の糸がぷっつりと切れたのか、道端の砂利の上にどっかと背の荷を置いてしまった。

はるか南に我が家が見える。あの柾の垣根にかこまれた我が家である。あの刈り込には毎年2、3日を使っての夏の作業の苦しさを思い出した。まだその頃は原っぱが続いていて見通しはよかった。路傍の草も林の木々もみな故郷の懐かしさにくるまれて迎えてくれる。通りがかった近所の人に家への伝言を頼む。力が抜けたのか、荷も持ち上げられないし、足も言うことをきかなかったのである。妻と娘が荷車を引いてきてくれた。幼い娘は、その時たまたましていた手の包帯を気にして、「お父さんがこの手を見てなんて言うだろう。」などと妻にさかんに聞いていたとのことである。父も喜んで迎えてくれる。みんなが無事で、これでよかった。一瞬空虚が体をよぎる。これからどうなるんだろう。戦争に直接関係した人は、その関係度の高さや広さに並行して誰もが感じたものであろう。

夏とか初秋の空に飛ぶ「千切れ雲」のような自分の人生を思って、まとまりきれなかった情けなさを恥じる思いであるが、ただその長い年月を貫くものに、祖先から引き継いだものを少しでも残して引き渡していきたい気持ちと、家族の幸せと我が家の繁栄を願って尽くした努力の跡を残しておきたいとの思いで、拙い文におさめてみた。

(注2) 椿山飛行場……現在の青森県むつ市椿山。
(注3) 真戸……現在の青森県下北郡大間町真戸地区。
(注4) 詔勅……天皇が意思を表示する文書。

六十数年前の激しくも悲惨な体験記憶

西永　一正

昭和17年1月元旦、比島[注1]ルソン島北部のリンガエン湾に敵前上陸をする。これが戦争体験の始で有る。

比島はダグラス・マッカーサー将軍が司令官で米比25万人がいた。首都マニラを無防備都市宣言をして同時にバターン半島のジャングルに要塞陣地を構築し、大半の兵士が立てこもる。我が軍は、首都マニラを攻略する目的であったが作戦を変更する事になりこれが問題でもあった。

我が軍は本間中将を14軍司令官に6万余であった。私が所属する部隊は、第65旅団141連隊2大隊本部で2大隊長旧部少佐であった。

米軍は地の理を得た戦場であるに、我が軍はバターン半島[注2]はわからず作戦上困った事であったので苦戦であった。激戦に続く激戦にて戦死傷者が続出し、2大隊旧部少佐も戦死された。3月まで続いた激戦に兵力などを失い、本土より兵員火器を増強され4月3日からバターン総攻撃によりバターン半島作戦も終了した。この作戦にて我が連隊の戦死傷者は40%の800人に達した。いかに激戦であったか解る。幸いに私は無事であった。マッカーサー将軍は早くも家族を連れてオーストラリアに逃避していた。5月5日にマニラに入場する、今井連隊長はマニラ防衛司令官となり、我が2大隊は新たに立川中佐が隊長となり、雀東大学に北地区防衛隊を置きマニラ北地区の防衛に当る。

17年11月末にニューブリテン島のラバウルに転進命令にて遠洋艦熊野にてマニラを出発。5日後にラバウル港に到着する。ラバウルに第8方面軍司令部があり、今村大将が司令官で南太平洋の全般の指揮を取ってきたが、多くの島で大変な様であるガダルカナ島やボーケンビル島が米軍の反攻にて撤退する等、状況は不利であった。又米軍の反攻も激しくこれも比島より逃げて行った。マッカーサー将軍であった。5月半に西部ニューブリテン島のツルブ地区に旅団は転進を命ぜられる。この頃から弾薬、食料も不足がちにて、原因は補給が難しくなったのである。特にツルブ地区は未開の土地にて密林地帯のジャングルにて空を見ても空が見えないくらいの大木が林立している様な土地であった。時折、米軍機が来て機銃掃射をする様になる。

12月20日頃より、米軍の猛烈な艦砲射撃と爆撃が始まる。米軍が上陸すると察しられる果たせるかな、米海兵1ケ師団が上陸する。我が方も必勝の精神でこれに対して戦えども何分にも物量戦に勝さる米軍に対して弾薬、食料もない我が軍は戦いにならず、特に南方特有の熱病、マラリア等にて、まるで地獄の戦場であった。次々と後退するより他は無く、さすがに連隊長も司令部に軍旗と共に敵陣に突入玉砕すると報告、その司令部より1兵でよいからラバウルに帰る様に命令あり、1月20日頃よりラバウルまで400キロメートル、3ヵ月に渡る「力」号転進作戦が始まったのである。道なきジャングルを切り開いての転進、大変であった。力尽きて倒れる者続出、これを助ける事も出来得ず、いずれもジャングルの土と化してしまった。戦友の認識表は確認のために持ち帰る。

(注1) 比島……フィリピン島のこと。
(注2) バターン半島……フィリピン・ルソン島のマニラ湾の北側にある半島。太平洋戦争の激戦地。

4月末にラバウルの高台トーマ地区に到着する。我が連隊はツルブ戦と「カ」号作戦により80%の1,600名がジャングルの土と化して言葉に表現でき得ない悲惨な戦いであった。ラバウルに到着すると兵員の増強を待てマッカーサー米軍を迎えて戦うべく準備をする。

マッカーサー米軍は比島・沖縄へと日本本土を目指して北上していた頃、米軍による特殊爆弾に日本本土は大変で有るとの情報が有る。

20年8月16日、日本敗れたりの情報にて連隊旗の焼却式が行われ、軍隊としての組織は失われ集団生活に入る。トーマ集団となり兵器はないが秩序を保った階級章は付けていた。9ヵ月の集団生活の後、21年5月16日、祖国名古屋港に入港する、無事に帰還の第一歩で有る。広島県三原市の故郷に帰ると父母は夢ばかりに喜んだ。無事に帰ってきたことを東京の会社に報告すると、2週間ぐらいで上京されたしとの通知にて上京して見ると東京もいまだ焼け野原にて内地も大変であった事を感じた。

これからは祖国復興になき戦友の分まで働く決意で働いた。私が無事に帰還が出来得たのも運、不運では割切れない、人生とは、運命とは奇勝に近いものを感じます。

二度と戦争のない永久に平和な日本で有る事を祈ります。89歳の老人の戦争体験記とします。

戦友の面影

佐藤　友二

出身地、富山県富山市岩瀬町

昭和15年1月10日、広島県の呉海兵団入団す。

昭和15年4月呉海兵団卒業して三重県鈴鹿海軍航空隊に転勤命令。自分勝手に取消す事出来ません。

私は、海軍航空隊整備下士官でした。敵の航空隊戦艦に損害をあたえて無事帰還。明日の戦闘にそなえて整備し、特に乗務員に不調箇所を聞き、次の攻撃に、ヤシの木陰を利用して整備いたしました。気持はどうか無事に生還した時のうれしさ涙が止まらず。

何号機は帰らずの知らせに、計り知れない悲しさが止まりませんでした。戦友の面影が、今になっても忘れようにも忘れることは出来ません。

多かりし陸戦隊

内野　實

横須賀海軍第1特別陸戦隊の上海戦

横1特[注1]は昭和12年8月17日午前2時上海に向け出動の命令が下り、忠霊塔に別れを告げ本曾と第10駆逐隊に便乗して一路上海に急行した。

翌18日夜は初陣の我々にも遠慮無しの敵弾が飛来したが幸いにも軽傷者が出たのみだったが呉特別陸戦隊より生々しい戦死傷者が運ばれてきた。翌19日兵火敵弾の街を淮山路に進み、付近一帯の家屋を探索して便衣隊の掃討を行うも何処からともなく敵弾が飛来し、一時も油断を許さぬ神経戦の状態だった。夜になると本格的な攻撃を仕かけてきた。またたく間に540発入りの弾薬筐[注2]は打ち尽され、かくして戦闘は一晩中繰り返し続いた。

敵は昼間を便衣隊として暗躍し地理家屋の状況に精通しているので要所要所に待ち構えて、我軍の後方に肉迫して来たので絶えず斥候戦や便衣隊狩り等を行い昼夜連続大軍を相手に必死の戦いを続け飯も服も汗も考えるいとまも無くただ敵状ばかり考えて居た。8月下旬大陸の酷熱下でよくも倒れる者が出なかったなと思った。遺棄死体の腐敗する独特の臭気にいささか閉口したが2、3日でなれ、それを見ながら嗅ぎながらでも握り飯を食べられるようになった。

22日午前9時、我部隊は中部支那に陸軍の上陸を誘導するため堅陣な呉淞に敵前上陸を決行することになった。身の回りを整理し親兄弟に最後の便りを書き準備万端を整え鎮痛剤[注3]の冷酒を戴き午後10時に出発した。

招商局の桟橋に至り一六夜月[注4]のもと、不気味な一固りの将士に大隊命令は下され我々は屍となってなお敵を倒す決心で成功を誓い合った。

我が中隊は御用船当陽丸に乗船、両岸静寂で声なき死の黄甫江[注5]を粛々として下航した。私達は連日連夜の戦闘のつかれで戦前の一眠りを鉄兜枕甲板でグッスリ眠った。ふと気がつくと明けて23日午前2時過ぎで上陸予定地点に近づいていた。間もなく付近の軍艦より一斉に上陸の援護射撃が開始され、我海軍誇りの射撃速度を発揮して敵陣営に制圧しつつあった。

敵の猛射撃はいよいよ激烈となり数メートル前の道路に取り付く迄には全滅かと思われたが弾が高く当陽丸にバラバラ当っていた。

上陸前我方の猛烈な艦砲射撃に耐えて陣地を死守した敵軍もさすがに内戦で百戦錬磨の軍隊であった。

折から雲間を出た残月が凄惨な戦場を照らした時俄然右正横約300メートルにトーチカ陣地[注6]に通る塹ごうを発見、直に重機を以って猛射を浴びせかけると浮き足立った敵は応戦する間も無くバタバタと倒れ、更に敵を追って100メートル余り前進してついに軍工路の予定占領線に達し民家の上に日章旗を掲げた。

続々と上陸した陸軍は残月にひるがえる日章旗を目標に日の丸の小旗を振りながら進出し、此処に軍工路を確保した陸軍隊は引揚げ命令が出たのは午前6時で夜も白ら白ら明け始めた。

上陸地点の江岸に引き揚げたが、戻って

(注1) 横1特……横須賀海軍第1特別陸戦隊の略。　(注2) 弾薬筐……弾薬を入れていたかごのこと。
(注3) 鎮痛剤……悪い事の時に酒類のふたを開くこと。　(注4) 一六夜月……陰暦16日の夜の月。
(注5) 黄浦江……中国、長江の支流のこと。　(注6) トーチカ陣地……コンクリートで堅固に構築して内に重火器などを備えた防禦陣地。

こない戦友が心配でならず仮包帯所か負傷者収容所を探し歩いて負傷した戦友を励まし又声なき手を固く握って最後の別れを惜しみました。

本部では成功の祝酒を戴き次の戦闘準備を整えて1泊、24日早朝、再び富山道方面の戦争に配備された。ああ何たる惨状でしょう。左前方100mの陣地は敵兵のため廃陣となり、しかもそこには幾つもの味方の屍が累々としているではないか。我々は切歯(注7)して直ちにこれを奪還して8月の炎天にさらされている味方の死体収容を決意したが損害を増すのをさけてまず陣地の補強をして夜戦を待つこととなった。

夜戦に入り全火力をあげて猛撃を加えて撃退し、翌早朝に至り奪還収容することができた。その頃、上海は彼我の砲撃爆撃等で至る所で火災が発生しその黒煙りは天日を覆っていた。かくして数日にして敵を1,000メートル以上敗退せしめた。

上海陸戦隊本部の見張り所には高く大軍艦旗がひらめき全軍を激励していた。

稲取基地の終戦当時について

8月15日終戦、第16突撃隊は徹底抗戦と決し相模湾に侵入してくる米軍の艦船に対し突撃する方針が決定しその準備をしていた。

ところが、マッカーサーは空路厚木飛行場に進駐することとなり「○月○日までに○○より○○を結ぶ線以北に総ての軍人は撤退せよ。もしこれに反する者は捕虜とする。兵器弾火薬の引渡し要員は指定される人員を残留させる」との通報を受けた。

8月24日出港。翌25日、出港前の反撃計画は海軍部内の大勢によるところから大きく変更され同隊において解員帰郷した。

一方稲取基地では出港前に兵器弾薬引渡要員が下命された。海軍施設部との連絡を始め民間会社家屋買上げ後の問題等の接渉があり米軍に兵器弾薬の引渡し以外の終戦事務処理が多々あった。当時、伊豆地方では米軍の進駐が近づいたら婦女子は山中深く逃避しろ。捕まった男子は去勢されて奴隷として酷使されるとか様々な流言が乱れ飛んでいた。

私達4名はひそかに自爆用の兵器を別途用意していたが米軍の接収担当将校が大変紳士的に接収を進めてくれたのでその必要のないことを見極めた後に処分した。

(注7) 切歯……ひどく無念に思うこと。